

2018 vol.19

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

特集

京都大学こころの未来研究センター創立10周年記念



ごあいさつ

今年の4月から、吉川左紀子初代センター長からその職を引き継ぐことになった。こころの未来研究センターは、小さいながらも非常に多くの分野にわたっているので、センター長としても様々な業務があり、また多様性が求められる。こころの未来研究センターは、中で活動している者にとって刺激が多く、楽しいところである。それは、たとえば滞在研究者のリピーターが多いことにも表れている。しかしそれが内に閉じてしまっていてはもったいないであろう。もちろん個々のスタッフが様々な形で外部の研究者、団体と連携し、また社会に向けて発信していることはある。それに加えて、この学術広報誌『こころの未来』が外に向けた重要な情報発信である。ネット社会とはいえ、手に取って見ることのできるものも大切である。今後も様々な人の力を借りながら、本誌を充実していければと思っている。

2018年8月

京都大学こころの未来研究センター長 河合俊雄

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2018 vol. 19

目次

ごあいさつ	河合俊雄
01 巻頭言 技術の進歩とこころの未来	出口治明
〈特集 京都大学こころの未来研究センター創立10周年記念〉	
02 10年を振り返って	吉川左紀子
04 基調講演 こころの未来から地球の未来へ	尾池和夫
12 講演 1 脳の研究からこころを探る	阿部修士
18 講演 2 こころの働きの文化・社会的基盤——地域社会における幸福とつながり	内田由紀子
24 講演 3 古文書からこころを読み解く	熊谷誠慈
30 ディスカッション こころの科学から見た未来社会	吉川左紀子+河合俊雄+小村豊+ 広井良典+阿部修士+内田由紀子 +熊谷誠慈
38 総長ごあいさつ	山極寿一
40 エッセイ 「こころ」という難問	佐伯啓思
42 エッセイ こころの未来研究センター創立10周年記念特集に寄せて	下條信輔
44 2007年～2017年京都大学こころの未来研究センターの歩み	吉川左紀子
研究プロジェクト	
45 研究プロジェクト一覧（平成28年度）	河合俊雄
46 身体疾患・症状に関する心理療法の研究	小村 豊
47 「もの」のカテゴリ化と嗜好性の計算機構	小村 豊
48 身体・脳の情報を統合するコグニオミクス	阿部修士
49 意思決定と社会性の神経基盤の研究	内田由紀子+中山真孝+柳澤邦昭
50 畏怖・畏敬感情の機能に関する心理学・神経科学的研究	上田祥行
51 環境中の統計情報に対する潜在的認知とその影響	広井良典
52 鎮守の森とコミュニティ経済	カール・ベッカー
53 終末期に対する早期支援	吉川左紀子+上田祥行
54 対人相互作用にかかわる認知・感情機能——リアルなシリコンマスク着用時の個人同定	吉川左紀子+内田由紀子
55 つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさ	内田由紀子+竹村幸祐+福島慎太郎
56 農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子+福島慎太郎+竹村幸祐
57 地域の幸福プロジェクト	上田祥行
58 集団場面における社会的認知——顔知覚による検討	柳澤邦昭
59 期待感とこころの豊かさについての研究	河合俊雄
60 こころの古層と現代の意識	熊谷誠慈
61 ヒマラヤの宗教精神とその現代的意義	河合俊雄
62 子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	田村綾菜+小川詩乃+吉川左紀子
63 発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	畑中千紘
64 大人の発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
65 文化・歴史的観点からのこころの豊かさ比較研究	広井良典
66 福祉と心理の総合化に関する研究	広井良典
67 ポスト成長時代の経済・倫理・幸福	広井良典
68 持続可能な医療・社会保障に関する研究	カール・ベッカー
69 遺族の癒しと健康に関する研究	吉岡 洋
70 東アジア地域におけるメディア芸術の特性に関する研究	吉岡 洋
71 見えない人々による美術表現に関する研究	内田由紀子+竹村幸祐+中山真孝
72 組織文化とこころのあり方——日本における企業調査	清家 理
73 孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究——京町家「くらしの学び庵」プロジェクト	吉川左紀子+内田由紀子
74 こころ学創生：教育プロジェクト	阿部修士
75 連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	熊谷誠慈
76 国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究	清家 理
77 倫理的観点に基づく認知症介護の負担軽減——認知症における介護者well-being scale開発研究	伊勢武史
78 自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは——市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて	長谷川千紘
79 甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	積山 薫
80 高齢者の認知能力に及ぼす運動スキルの影響とその神経基盤	野口寿一
81 新入社員の不適応予防につながるアセスメント法の開発	
82 センターの主な動向（2017年4月～2017年9月）	
編集後記	

編集後記

当センターに来てはくはまだ2年半、10周年特集号の編集後記を書くにはちょっと肩身が狭いなど思ったが、考えてみたら前任地である文学研究科に着任したのは2006年10月だから、京大の中ではほくのほうがセンターより半年だけ先輩、ということになるかな……などと威張ってみてもしょうがないんだけど（笑）。（吉岡 洋）

センターの明確な特徴の1つは、学問分野の垣根や文理の区分を超えて自由な探究や議論ができることであり、それは10周年記念シンポでのディスカッションにもよく示されている。自分自身は10年の歩みのかすかな一端に参加したにとどまるが、その節目に立ち会えたことを幸いに思う。（広井良典）

創立10周年。私自身は2012年に着任したので、センターに所属して5年の月日が流れた。この5年の間、日々の研究や様々な研究者との交流を通じて、新たな視野を獲得することができたように思う。「濃密」な時間を過ごせるセンターで働けることに、心から感謝したい。（阿部修士）

こころの未来研究センターは創立10周年。教授4名でスタートした組織が、教員15名の組織に成長し、様々な分野のこころ研究が行われるようになりました。本号を通じて、本センターの学際性をご理解いただき、多分野の方々に興味を持っていただけると幸いです。（熊谷誠慈）

本誌はこころの未来研究センター創立の翌年9月に創刊号を刊行、以来、基本的に年2回刊行してきました。あらゆる学問の垣根を取り払ったまさに知の饗宴、編集に迷ったり悩んだりすることも多く、編集委員の先生方はじめ皆様に支えられてここまで来れたことを改めて感謝いたします。（原 章）

*お詫びと訂正

本誌第18号、宮本みち子先生「支え合う社会を」の中で、35頁に次の誤りがございました。

海外体験は若者たちに「何か」を与えていることはまちがいないという

↓

海外体験は若者たちに「何か」を与えていることはまちがいないという

ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。

発行日 2018年8月31日

発行 京都大学こころの未来研究センター

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46 京都大学稲盛財団記念館内

電話 075-753-9670 FAX 075-753-9680

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/>

編集委員 広井良典+吉岡 洋+阿部修士+熊谷誠慈

表紙写真 京都大学稲盛財団記念館

編集・制作 編集工房レイヴン 原 章

デザイン 鷲草デザイン事務所 尾崎閑也+東 浩美

印刷 株式会社 NPC コーポレーション



京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER · KYOTO UNIVERSITY
こころの未来研究センター

